

# ウガンダ元大統領代行、故オボス=オフンビの遺品 ( I ) 1971年英国外遊時のアルバムを中心として

梅屋 潔\*

## **Relics of the Late Oboth-Ofumbi (1924–1977), Part I: With Special Reference to the Album of His Official Visit to London in 1971**

Kiyoshi UMEYA

### Abstract

Janani Luwum Day was established as a new national holiday of the Republic of Uganda on 16 February 2015. This was followed by President Museveni's surprise courtesy call to the mansion of late Charles Oboth-Ofumbi in Tororo on 25 July 2015, one of a series of gestures made to commemorate prominent persons of Luo origin – those who were 'sacrificed as victims' under Idi Amin's regime. The gesture has, however, been criticised as being part of a political campaign. Rather than assessing the result of the campaign and its political importance for the current government, the focus of this paper is the gravity of the site and the relics preserved in the mansion. The paper introduces some of the mansion's relics, focusing on a photograph album and a reel of 16mm film of Oboth-Ofumbi's official visit to London in 1971; it then evaluates the importance of these relics and reconsiders their historical value by emphasising the anthropological context.

Keywords: Amin's Regime, Minister, Janani Luwum's Day, Relics of Oboth-Ofumbi

---

\* 神戸大学大学院国際文化学研究科准教授／東北学院大学人間情報学研究所客員研究員  
Kobe University / Tohoku Gakuin University [umeya@people.kobe-u.ac.jp](mailto:umeya@people.kobe-u.ac.jp)

## はじめに

2015年7月25日、ウガンダ大統領ヨウェリ・カグタ・ムセベニ (His Excellency the President of the Republic of Uganda, Yoweri Kaguta Museveni) は、突然ヘリコプターで当地のアルファクサド・チャールズ・コレ・オボス=オフンビ (Arphaxad Charles Kole Oboth-Ofumbi 生没年月日は1932年7月12日-1977年2月17日)<sup>1</sup> 邸を訪れた(写真1)。大統領は、故人の

<sup>1</sup> 1932年7月12日にトロロ県トロロ市街地のはずれアグルルで生まれ、その日ムランダで受洗。オボスとは、「耕したばかりの畑で生まれた子」の意である(ランギ民族におけるオボテと同名)。キソコ初等学校(1942-7)、ムバララ高校(1948-50)、キングズ・カレッジ・ブド(1951-3)を経てマケレレ・カレッジへの進学を希望していたが、父セム・コレ・オフンビの死によりそれを断念。エンテベの協同組合アシスタント・コース(1954)修了後ブケディ協同組合にアシスタント(1954-8)。ブケディ県弁務官室(1958-60)。弁務官を補佐していたゼファニア・オチェンの助力を得てDhopadhola(当該民族の現地語であるアドラ語)で民族誌『パドラ』を出版したのはこのころである。エンテベのサンミジ地方行政職のコース修了後(1960)に地方行政職に転じ(1961)、行政官(1960)の資格取得後、アチョリ・ランゴ県の県副弁務官(1961年1月30日付け)。アチョリ県弁務官(1963, 7月7日からはグル都市議会書記も兼任)。1962年の総選挙で大勝したウガンダ人民会議(UPC: Uganda People's Congress)の党首で総理大臣となったオボテによって独立後(1962年10月9日)、1963年12月10日には総理大臣室秘書官補佐(1964)、同上級秘書官補佐(1964)。1964年からは4月27日づけで兼任の他方行政省地方監査官、8月20日付け、内閣書記官、9月1日付け、総理大臣室上級書記官長補佐長。総理大臣室書記官長(1965)。国防省次官(1971)。続くクーデター後のアミン政権成立で国防担当大臣(1971)、国防大臣(1971-1973)、財務大臣(1974-1976、内務大臣と兼任)、内務大臣(1974-1977)などを務め、大統領外遊時の大統領代行。その間、妻のエリザベス・ミリカ・ナマ

妻エリザベス・ミリカ・ナマゲンバと息子、娘たちにむかえられ、故人の生前の国家に対する貢献を讃え、その墓に花を供えた(写真2)。屋敷にはトロロの元CAO(Chief Administrative Officer)、シルヴェスター・オボス他地元の名士が顔をそろえ、そしてあの『血塗られた国家』の著者であり、故人とアミン政権閣僚として同僚でもあったヘンリー・チェンバ(Henry Kyemba 1939-)もスピーチをした。その内容にはまた別稿で触れることもあろう。

その様子は、国营放送UBC(Uganda Broadcasting Channel)でも大々的に報道されたほか、代表的な英字新聞『ニュー・ビジョン(New Vision)』紙や『デイリー・モニター(Daily Monitor)』紙にも写真入りで報じられた<sup>2</sup>。なかでも『デイリー・モニター』のヘン

ゲンバ(Elithabeth Mirika Namagemba 1937-)との間に、ルース・アプワ・ニヤケチヨ・オフンビ(Ruth Apuwa Nyakecho Ofumbi 1956-1958、2歳で夭折)、マイケル・ジョージ・ステイヴン・セム・オフンビ(Michael George Stephen Semu Ofumbi 1957-)、サミュエル・ロバート・オボ・オフンビ(Samuel Robert Obbo Ofumbi 1960-)、エステル・グラリス・ニヤゴリ・オフンビ(Esther Grace Nyagoli Ofumbi 1962-)、ゴドフリー・ヨラム・オティティ・オボス=オフンビ(Godfrey Yolamu Otititi Oboth-Ofumbi 1964-)、エリザベス・エヴリン・プリシキラ・オリヤナ・オフンビ(Elizabeth Evelyn Pulisikira Olyana Ofumbi 1965-)、スーザン・サーラ・マンジェリ・アロウオ・オフンビ(Susan Sarah Manjeri Aliwo Ofumbi 1970-)、マーガレット・ジェーン・ナスワ・ニヤディボ・オフンビ(Margaret Jane Naswa Nyadipo Ofumbi 1972-)、クレア・ロビナ・アウォリ・オフンビ(Clare Lovina Awor Ofumbi 1977-)、オボス=オフンビ死後の出生)ら、3男6女をもうけた。1977年2月16年歿[Government Printer n.d.ほか]。

<sup>2</sup> "Museveni Hails Slain Minister." *New Vision*. Monday,

リー・ルベガ記者は、それにそなえて特集記事を前日分も含む二回にわたって掲載したほどである<sup>3</sup>。とくに注目すべきは、オボス=オフンビの日記（現存）にもとづいて、アミン政権（Idi Amin Dada<sup>4</sup>）の大統領代行を務めた9日

---

July 27, 2015. "Museveni Honors Former Minister." *Daily Monitor*. Monday, July 27, 2015.

<sup>3</sup> "Losing My Husband in the Amin Era and Life After." *Sunday Monitor*, Sunday, July 10, 2015, [http://www.monitor.co.ug/Magazines/Life/Losing-husband-Amin-era-life/-/689856/2793414/-/w7rnb/-/index.html 2015年9月2日閲覧]、"Oboth Ofumbi's Nine Days as Acting President." *Sunday Monitor*, Sunday, July 26, 2015 [http://www.monitor.co.ug/Magazines/PeoplePower/Oboth-Ofumbi-s-nine-days-as-acting-president/-/689844/2807992/-/item/0/-/26qo9w/-/index.html 2015年9月2日閲覧]。

<sup>4</sup> Idi Amin Dada Oumee (1925年- 2003年8月16日)。幼名をイディ・アウォ=オンゴ・アンゴ=Idi Awo-Ongo Angoo。生年については諸説あり、1924、1925年あるいは1928年という記述もある。西ナイル県とスーダンの国境近辺のコボコ出身といわれる。カクワ人の父とルグバラ人の母の間に生まれた。民族をまたがりイスラム教を紐帯とするコミュニティ、通称ヌビとして育った。1946年よりKAR (King's African Rifles) に在籍し、ビルマ戦線に参加、1949年の世界大戦終戦まで前戦にいた。マウマウ運動鎮圧に参加 (1952-1956)。中尉となり、保護領時代2名の現地人のうちのひとり大英帝国より将校の職権を与えられていた。彼があるときから自称し、他にも強要した呼称は、His Excellency, President for Life, Field Marshal Al Hajji Doctor Idi Amin Dada, VC, DSO, MC, Conqueror of the British Empire in Africa in General and Uganda in Particular。VC (Victoria Cross) はヴィクトリア十字勲章、DSO (Distinguished Service Order) は殊勲章、MC (Military Cross) は、従軍十字勲章の略。ただし、アミンがこれらの勲章を実際に授けられた記録はどこにもないといわれている。大統領としての任期はシンガポールにおける英連邦会議出席中のオボテ大統領からクーデターにより政権奪取した1971年1月25

間を再構成した記事である。このことは、大統領代行という職以上に彼がいかにアミン政権、あるいはアミン大統領にとって頼りにされていたかを物語るものだった。前日の記事では、アミンのとくにブガンダでの人気を不動のものにしたイギリスからのムテサIIの遺体搬送と国葬がオボス=オフンビの提案だったことが夫人の口から語られている。ルオ系民族に支持者の多いUPC (Uganda People's Congress = ウガンダ人民会議。オボテが党首だった政党) 系と噂される『デイリー・モニター』にふさわしい突っ込みである。

もちろんこのような綿密な取材を可能としたのは、一朝一夕の関係ではない。すでに紙面刷新以前の『ザ・モニター』紙だった2002年に「ウガンダ・ジャーナル」として特集を組んでいた。2月16日の「大主教ルウム、大臣オフンビ、オリエマは殺害された」とする記事と、翌17日の「イディ・アミンは親友チャールズ・オボス=オフンビを殺した」と題する記事である<sup>5</sup>。ここでは、オドーボ・C・ビチャチ (Odoobo C. Bichachi) なる記者が、署名入りの

---

日からオボテ元大統領がタンザニア軍の協力を得た反乱軍によって敗走する1979年4月11日まで。その後サウディ・アラビアに亡命。亡命時の約束を遵守し長らく沈黙を守った。2003年7月下旬危篤が伝えられた。当時その体重は220キロを上回っているといわれ、透析しながら意識不明と回復を繰り返し、二回の腎臓移植を敢行するが功を奏さず、2003年8月16日午前7時（東アフリカ標準時間）死亡。ウガンダの歴代元首としては唯一国葬の対象とならなかった。

<sup>5</sup> "Archbishop Luwum, Ministers Ofumbi and Oryema Murdered." *The Monitor*, 2002年2月16日号, pp.24-25, "Idi Amin Murders Ex-bosom Friend Charles Oboth-Ofumbi." *Sunday Monitor*, 2002年2月17日, pp.26-27.

記事を書いているのである。

ムセベニ大統領の訪問は、家族にも事前に予告はあったものの、最終的な告知があったのは前日のことであった。事前予告を受けて長子マイケル、次男サミュエルらは亡命して定着した米国から1ヶ月間の予定で帰国していた。

## 1 ルオ系著名人の追悼

オフンビ邸の訪問は、先の2014年9月18日にムウォヤ県で行われたエリナヨ・オリエマ Erinayo Wilson Oryema (1917-1977)<sup>6</sup>再埋葬と、

<sup>6</sup> Erinayo Wilson Oryema (1917-1977) は、旧アチョリ県キラカ郡、アナカ・パイラ出身。グル高校、ブワラシTTC、英国での研修を経て1939年、ウガンダ警察に就職。1940年KARに出向。1951年警部、1952年(英国)、1958年(英国)、1963年(英国・米国)での研修を経て、1963年副警視総監(アフリカ人として初めて)、1964年から警視総監(1964-1971)として辣腕を振るった。1958年には英国政府から植民地警察メダルを受賞。ケイ・アドロアとアミンが結婚時(1966)にはベスト・マンをつとめたほどだったが、クーデター後は鉱物水資源大臣(1971-1977)というそれまでのキャリアを全く生かせない閑職に追いやられていた。ケイ・アミンは、後にバラバラ死体となって発見されることになる。オリエマの息子ジェオフリー・オリエマ(Geoffrey Oryema 1953-)は、フランスを拠点に「アフリカン・オデッセイ」として歌手活動を続ける。父の死は彼の音楽活動にも大きな影響を与えているようで、代表曲のなかには父の霊を歌い込んだ“Spirits of My Father”というものもある。

<sup>7</sup> Lanani Jakaliya Luwum (1922-1977) は、旧アチョリ県ムチウニ出身。グル高校、1948年ボロボロ教員養成学校を経て教員。1948年受洗。1949年ブワラシ神学校。1955年執事。1956年牧師、1966年ウガンダ教会州事務局長、1969年に北部の主教となる。エリカ・サビティ(Erica Sabiti 1903-1988、大主教としての任期は1966-1974)の後を襲ってウガンダ人としては二人目の大主教(第三代。1974-1977在任)。20世紀10大殉教者の一人として、ウェストミンスター寺院にその像

それに続いてムチウニで2015年2月16日に行われたジャナニ・ルウム(Janani Jakaliya Luwum (1922-1977)<sup>7</sup>記念式典に連なる一連のものである(ここで大統領は2月16日を「ジャナニ・ルウムの日」として国民の休日とした<sup>8</sup>)。3人は同日のほぼ同時時間帯に時の大統領アミンに殺されたとされているからである。

実際に、オリエマの再埋葬については、ゴドフリー・オフンビが故オボス=オフンビの代理として招待され出席してその様子を私に語った。

「他に周りに人家はなかった。すぐ近くに野生動物がいる国立公園のような場所の近くに、わずかな墓標があるだけの墓だった。オリエマの家族はあたりにもう住んでおらず、荒れ果てていた。埋葬時にコンクリートでカロートはつくられなかったので、棺はすべて腐敗してかたちをとどめていなかった。ビニールのテントのような布にくるまれた遺体は、頭蓋骨の一部と、体幹のものと思われるわずかな骨が確認できただけで、確認できた骨は少しかった。勲章などの憑いていない普通の軍服が着せられていたが、驚いたのは、それに血のしみがついていたことだ。38年も経っているというのに。医者にも聞いたが、血液というのはそのように長く痕跡をとどめるものだとは知らなかった。」<sup>9</sup>

が置かれている。現地では聖人とみなしてトロロ県ナゴンゲラに聖ジャナニ・ルウム教会の建設がウガンダ教会第五代大主教ヨナ・オコスによって計画されたが、2001年ヨナ・オコスが他界した折りには、まだ志半ばであった。

<sup>8</sup> “Museveni Declares February 16 Public Holiday.” *Daily Monitor*, Monday, February 16, 2015, “February 16 Named Janani Luwum Day” *Daily Monitor*, Tuesday, February 17, 2015.

<sup>9</sup> 2015年8月30日、ムバヤ(Mbuya)でのインタビュー。

この一連の記念式典の挙行は、一般的には来る選挙にそなえて、北部・東部のナイル系民族に多いUPC支持層をけん制するためのものと考えられている<sup>10</sup>。近隣では、それに加えて霊的な色合いが付け加えられて、「今回の選挙では苦戦が予想されるので、勝利を得るために強力な死霊を随所で集めてまわっているのだ」という噂となっていることは紹介しておこう。

すでに梅屋 [2011] で紹介したように、私はACKと略称されるアミン政権時の国務大臣で、遺族代表ゴドフリー・オボス=オフンビ氏から遺品を拝借した。邸宅は、ウガンダ東部トロロ県のニヤマロゴにある。この周辺の歴史を知れば、この屋敷と隣接するチャペルと、隣村のコロブディにあるセム・K・オフンビ (Semu Kole Ofumbi c.1904年-1951年4月5日) の墓を含む一群の建造物が、非常に重要な意味合いを持っていることがわかる。

## 2. 遺品

最初に複写目的にこれらの遺品の一部を借りたのは2002年10月9日のことだった。借り出すことができたのは、1956年、1972年、1973年、

1975年分の日記（以下D1956、D1972、D1973、D1975と表記する）と、外遊した際の2冊のアルバム（以下AⅠ、AⅡ）そしてIDカード（ACKのもの（写真3）と母のもの）だった。AⅠは1971年、AⅡは1969年のものと推定されている。単純に飛行機に預ける荷物の重量を考慮したためである。その後、アルバム5冊（AⅢ～Ⅶと表記）および4巻の8ミリおよび16ミリフィルム（FⅠ～Ⅳ）を借り出した。紙挟みに挟んであった公式文書類は、許可を得て2004年に現地に持ち込んだスキャナーで複写し、保存した<sup>11</sup>。フィルムについては専門業者にテレシネを依頼し、デジタル化した。

<sup>11</sup> 紙挟みにあった文書のうち、以下重要と思われるものを列挙する。

1) 「Who's Who in East Africa [Wilson 1963-1964] の原稿の写し」

『東アフリカ紳士名鑑』のゲラのコピーもファイルされていた。もとの記載に加えて詳細な情報提供がされている。セルフ・プレゼンテーションへの意欲がうかがわれる。

2) 「休暇申請1965.06.09」

1965年6月9日づけで、首相官邸に出された休暇願。宛名は首相官邸。1965年の11月からの218日間の長期休暇申請である。公務に就くようになってからたびたび休暇申請しているが認められていない。故郷の畑の手入れをしたいので、という主旨である。かなり強い調子で要求しているが、この希望は受け入れられなかったようである。

3) 「総理官邸上級書記官長補佐長の就任1965.09.25」

奇妙なことだが、私が調べた限りでは、『官報』には、65年号に64年9月1日づけでprincipal assistant secretary、office of the prime ministerとの記載を最後に記録がない。先の希望が受け入れられていれば、この文書も書かれなかったに違いない。

4) 「配置換え希望 1965.12.16」

結局はそういった配属替えの人事はなく、オボテ大統領下で彼はオボテの側近として出世していくのだ

<sup>10</sup> アパッチの県弁務官 (RDC: Residence District Commissioner) として前回の選挙に協力したMrs. Mary Nyakecho Oworは、先の選挙で大統領を村落に案内して得票率を上げ、大統領から直々の褒め言葉を得たことを語った。「一生に一度大統領を見ることができかどうかという人々が住む村落の直接巡行は、現政権の支持層が多い都市部を回るよりもずっと効果があるのだ」。またウガンダ人民会議 (UPC: Uganda People's Congress) の党首だったオトウヌ (Olara Otunu 1950-) は、インテリらしく同じ政治的活動を出版で行った。つまりジャナニ・ルウムの伝記を出版したのである [Otunu 2015]。

が、この二通の書類は、彼がどうしてもこの時期に政府の中枢から離れようとしていたことを思わせる、ことによるとオチェンの告発を知っていたのではないかと考えることもできそうな、興味深い文書である。

5) 「Kalimuzoの1967年1月23日から14日間の休暇 1967.1.19」

第一次オボテ政権下でACKが官僚として決定的な権力を掌握する経緯について語る文書である。ここでは、そのとき内閣官房長官だったフランク・カリムゾが登場する。彼は、1967年2月27日からの休暇申請を出している。

6) 「正式な代理任命の要請 1967.02.20」

1月23日からその職務を代行していたACKは、書面で官房に問い合わせ、続けて代行する確認を取っている(2月20日)。その後、カリムゾは28日間から48日間に休暇の延長申請し、それが認められたことが、3月3日付けの首相官邸秘書官ワコリ (Joshua Nabusoba Khaluswa Wakhohi: 1926年生まれのブギス生まれの官僚。ナブマリ高校出身)の文書から知ることができる。同じ3月3日付けで、ACKの代りが全政務次官宛てに告知されている。これはACK自身の名義で行われた。

その後カリムゾは、官房長官職に復職することはなかった。1967年の12月まで休暇を取るようすすめるワコリ名の3月29日付けの文書が残されている。この間に、彼が何らかの裁判に巻き込まれ、職場復帰を約束していた5月22日にはカバレの裁判所に出頭命令が出て復帰できないことを公式に報告するテレグラフのコピーも残っている。

7) 「Kalimuzoの任務は有効、ACKは新憲法により代理のまま」

総理府政務次官ラキディ (Eriky Y. Lakidi 1925年生まれのアチョリ、ナブマリ高校出身、英国サウスデヴォン・テクニカル・カレッジ出身の官僚)名の1967年9月12日の文書では、1966年に改正された憲法のせいで、カリムゾをもとのポストに戻せるのは大統領だけだ、という告知が首相官邸秘書ワコリに対してなされている。その際に、カリムゾの職務怠慢も指摘されている。

要するに、これらの文書を総合すると、カリムゾ外し、ともいえる動きが首相官邸近辺で行われていたようである。またその写しが当事者の一人であり、結果的には一番の受益者であるACKの邸宅にファイルされていたことには、重要な意味がありそうでもある。

カリムゾはその直後、おそらくは東アフリカ大学の教員になったのであろう。1970年6月、大学に昇格したマケレレの初代学長に就任した。1973年にはその現職のまま失踪。

「ゴールド・スキヤンダル」とそれに続く「66年危機」といえば、その後にながく続いたウガンダにおける政治的混乱の端緒にして象徴的な出来事として記憶されている。1964年ごろから激化したコンゴの内戦。ウガンダ軍はそれに秘密裏に介入した。1964年7月に首相に就任したモイーズ・チョンベ (Moise Kapenda Tsombe 1919-1969)は西側諸国の傀儡である、というのが当時のウガンダ首相、アポロ・ミルトン・オボテの判断だった。チョンベ支持の右翼は内閣の内部にもいたため、一部の閣僚にも伏せられていた。コンゴ産の金と象牙を売って武器弾薬を調達するのが、アミン大佐(当時)の役回りだった。

一説によると郵便局のミスで別のボックスに入っていた残高通知書から、アミンの銀行口座に480,000UGX(ウガンダシリング。当時のレートで約£UK24,000に相当)もの膨大な預金があることが漏れた。すでに癌で死を宣告されていたカバカ・イエッカ (KY: Kabaka Yekka) 党書記長、ダウディ・オチェン (Daudi Ocheng 1925-1967)は、この事実をもとに、アミン大佐がコンゴ東部から金と象牙、コーヒーを密輸入しており、首相を含む4名で125,000ポンドを分け合っている疑いがあると国会で告発した。1965年2月5日に\$1,500、2月15日に\$9,000、2月17日に\$3,000、2月26日に\$28,250、3月2日に\$3,250の振り込みがあったという。当時アミンは副業をもっていなかった。オチェンは国防大臣オナマ (Ferix Onama)に調査を求めた。オボテは、2月22日に5人の閣僚を閣議の席で逮捕。裁判も行われなかった。憲法を停止。

2月26日にはアミンを軍司令官に任命。3月3日には大統領、副大統領を解任して憲法を停止。4月15日には、軍に包囲された国会で野党議員全員と与党議員が抗議して退席したのちに暫定憲法を強行採決し、自ら大統領に就任した。新憲法は大統領に全権を集中させるものだった。これらの一連の事件は、5月24日アミン司令官指揮する軍によるカバカ宮殿の砲撃に象徴される「66年危機」につながってゆく。調査委員会に出席するため海外から帰ったオチェンは「腹痛」を訴え、入院先のムラゴで6月1日、41才にして死亡した。ルオ系の名を持つオチェンがKY書記長なのもオボテ政権に対す

これらのアルバム等の作成と寄贈はおそらく、外遊の際の外交慣例であったろう。その意味では非常に深い外交的意図を反映しているといえ、こうした遺品の重要性については、この一連の論考で次第に明らかにしていくが、ここではそのうちの2002年に借り出した英国外遊時のアルバム（A I）について紹介したい。ここでこうした資料を取り上げる理由は、（デジタル処理した理由とほぼ同じだが）一つは、このままではサバンナで死蔵されるだけでなく、劣化すること、散逸することが考えられることである。なおこれ以外にもオフンビ邸には適切に保存すべき書類や、物品が多く、これは別に保存のための事業計画を立てる予定である。

### 3. アルバムA I とF I

黒い革装の分厚い表紙がついており、黒い台紙に写真が貼り付けてある。その数は総計69枚で、キャプションはない。一見すると、ヒーロー空港に降り立ったところから時系列的に並んでいるものとみられる。

デジタル化に当たっては、台紙に糊で貼り付

---

る強力な反対勢力となったのも謎とされているが、オチェンの父親はアチヨリに育てられたがマディ出身で、ランギの妻との間にもうけられたオチェンは常にアチヨリの中で居心地の悪さを感じていたという。キングズ・カレッジ、ブドでムテサII（Major General Sir Edward Frederick William David Walugembe Mutebi Luwangula Mutesa II KBE 1924.11.19-1969.11.21）と出会い友情をはぐくんだことがのちにブガンダ王国のために忠誠を誓う素地となったという [Ingham 1994: 104]。ムテサIIとの友情と、ムテビII（Ronald Edward Frederick Kimera Muwenda Mutebi II 1955.4.13- ）への忠誠心は周囲を驚かせるほどで、タブロイド紙などは、実の父なのではないかとスキャンダラスに騒ぎ立てたことがあったほどである。

けてある写真を損ねないために、まずフィルムカメラで接写し、それをスキャンすることによりデジタル画像を得た。従ってこのA Iについては、ACK宅に保存されている現物のほか、接写したフィルムが現存する（著者所蔵）。

2004年に借り出した一巻の16ミリフィルム（以下F I）は、A Iと同時に作成されたものと見られる。A Iにはキャプションがないが、F Iと比較すると、A Iの背景と参加者、及び訪問先などが推測できる。以下は、F Iのナレーションと映像資料をもとに再現した訪問団のおおよその行動である。登場人物の職名などは、適宜 [Butler & Butler 2000]<sup>12</sup>により確認した。

### F I より再現したアミン新政権のウガンダ国防省一行の視察順路

#### ① ロンドン到着

1. ヒースロー空港にて（このロケーションはA Iと表記）。（当時はアフリカ方面への窓口となっているガトウィック空港はなかった）英国からは高等弁務官（High Commissioner）であるルカカムウア（Lieutenant colonel S. E. Lukakamwa）中佐が出迎え。ウガンダ側は、モンドー將軍（Maj. Emilo Mondo）とマルル將軍（Maj. Zed Maruru）、そしてオボス=オフンビ（F Iの最初のアナウンスでは名前は読まれない）。

2. 宿泊先のサボイホテル（Savior Hotel）で朝食。英国代表のアダムズ氏（Mr. Adams詳細不明）と（S=Savior 以下訪問先のイニシャル表記でロケーションを表記する）。

---

<sup>12</sup> この文献については阪野智一神戸大学教授に教示を得た。

3. ホワイトホール (White Hall) で、儀仗兵 (Guard of Honour) の儀礼的歓迎を受ける。F I ではかなりの時間が割かれているが写真はない。F I には兵士から迎えられ、インスペイティングする模様が記録 (W=White Hall)。

4. 一義的にはここに国防省のオフィスがあるからである。そこではバニール卿 (Lord Balmiel) が国防担当大臣 (Minister of State for Defence) として面会 (D1)。

5. アドマイラルティ・ハウス (Admiralty House) でランチョン。ホストはバニール卿 (Ad)。

6. 外務および英連邦相 (Foreign & Commonwealth Affairs) の事務局に表敬訪問。アミンからエリザベス女王宛の親書を次官補に手渡す。クーデターについての説明が記されているものと思われる (F)。

#### ② 2日目

7. 翌日、国防省を訪問。国防政務次官であり国会議員でもあるイアン・ギルモア (Ian Gilmore) に面会 (D2)。

8. 国防省内の会議室 (Counsel Suite) でアンダーソン氏 (Anderson) を議長に公式会議 (D3)。

9. 英国の国防担当大臣キャリントン卿 (Lord Carrington) が挨拶 (D4)。

10. グロスヴェナー・ハウス・ホテル (Grosvenor House Hotel) でJ・J・パークス (J.J.Parks) 氏の主宰するランチョン (G)。

11. 夕刻、ルカカムウァ夫妻がオボス=オフンビ歓迎の宴をハイド・パーク・ホテルで(H)。

※ここでF I ではいったんエンドロールがあらわれる。後半部分にある程度の軍事機密が含まれるので民間用と分けるためか。

エンドロールの文字は、以下の通り。

"Camera: Pat Wood Paddy Seale, Sound: Dudley Plummer, Editing: Sam Gupta, Commentary: Keith Skues, Produced and Directed by Julian Bray, Julian Bray Editorial Services Film Production."

#### ③ 3日目

12. 国防省の案内で、軍需工場へ。ラカル・エレクトロニクス (Racal Electronics) でハリソン氏 (E.T.Harrison) に挨拶。製造過程を隅々まで視察するほか、極端な温度変化や防水など劣悪な条件のなかでの機器の耐久性について説明を受ける。耐久試験など (R)。

#### ④ 4日目

13. レイヴェンホールにある (Ravenhall) マルコニ社 (Marconi) のレーダー試験場でマイク・スミス氏 (Mike Smith) の説明を受ける。同社のレーダーの兵器の追跡能力など軍事的利用可能性について (M1)。

14. コントロールルーム内部を視察 (M2)。

15. 4輪駆動の難地形を攻略する新型車両を視察 (M3)。

#### ⑤ 5日目

16. プリティッシュ・エアクラフト・コーポレーション (British Aircraft Corporation Limited) を視察。J・A・ジェファーソン (J. A. Jefferson) に説明を受ける (AC1)。

17. 以下、2名で操作できる軽量ミサイル機器の説明を受ける。カモフラージュしたミサイル搭載車両が360度レーダーにより周囲を把握し、模擬戦闘機を撃墜する実験など、デモンストラーション用の映像を視察 (AC2)。

18. 最新鋭の装甲車内部に実際に入ってみて視察 (AC3)。

#### ⑥ 6日目

19. リバプール・ストリート駅 (Liverpool



Street Station) からコーチェスター (Colchester) 方面行きの列車に乗り、スフォークのローストフト (Lowestoft)、ブルック・マリン・シップ・ヤード (Brooke Marine Ship Yard) へ。軍用ボートについての説明を受ける (B)。

⑦ 7日目

20. 別の路線の電車でワートルローからサザンプトンへ (WS)。サザンプトンからワイト島 (the Isle of Wight) へホバークラフトで (公共交通機関) (SO=Southampton)。プレッシー社 (Plessey Electronics) でジェリー・プライス氏 (Mr. Jerry Price) に面会。無線で航空機を操作する仕組みについて視察 (P)。

21. もう一台のホバークラフトでポーツマス (Portsmouth) へ (PO=Portsmouth)。

22. ヴォスパ・ソーニククロフト社 (Vosper Thornycroft) で軽食をとる (VT1)。

23. ここで建造されている軍用ボートを視察。最新機器のスペックを説明される (VT2)。

24. ウガンダへ帰国 (A2)。

FIによれば、この視察はこのような流れであったようだが、映像の後半の兵器の詳細が熱心に語られる部分についてはAIではさほど触れられていない。一つには軍事機密もあっただろうが、何より賓客でありアルバムを贈る相手であるオボス=オフンビ以下が登場しないため、外交上の理由で掲載する必要もなかったのであろう。また、特に後半部に顕著だが、いくつかは前後関係が間違えて台紙に貼られているようでもある (本稿では\*アスタリスクを付した)。おそらく列車とボートを利用しての視察旅行には、カメラマンは同行したとしてもこのアルバム作成者は同行しなかったのではないだ

ろうか。

レイアウトの都合上、写真はまとめて文末に掲載し、Appendixとする。写真にはそれぞれアルバム登場順にA-Iから69までの番号を付してある。キャプションには、若干の説明を加え、以上のロケーションの対応がわかるものについては記載することにする。

結語

以上、AIとFIを対照することにより、1971年 (と推測される) の英国外遊の際に面会した人物、訪れた場所が、次第に明らかとなってきた。また、7日間という当初予想よりは長期滞在であったことも明らかとなった。地図に落としてみれば、具体的な視察のルートがより詳細になることであろう。今後、現在では特定できていない人物の職名その他がイギリス側の公的資料から明らかになる部分もあると考えている。FIには若き日のサッチャーらしき人物も映り込んでおり、これらの会合のイギリス側からみた意義やイギリス側の思惑も分析が可能となるであろう。今後、AII D1956、D1972、D1973、D1975、AIII~VII、FI~IVにも同様の公開および検証を続けたい。もちろんFIのように同時につくられた資料がない場合にはこのような検証作業は容易ではないが、オボス=オフンビ邸に残された遺品を公開しながら、それぞれの歴史的価値を改めて探っていくことが今後の課題である。

参考文献

Butler, D. & Gareth Butler ( eds. )

2000 *Twentieth-Century British Political Facts 1900-2000*, Eighth Edition. London: Macmillan Press.

Ingham, Kenneth

1994 *Obote: A Political Biography*. London: Routledge.

Kyemba, Henry

1977 *A State of Blood: Inside Story of Idi Amin*. Kampala: Fountain Publishers.

Otunu, Olara

2015 *Archbishop Janani Luwum: The Life and Witness of a 20th Century Martyr*. Kampala: Fountain Publishers.

Government Printer

n.d. *The Form and Order of Memorial Service of Semu K. Ofumbi at Korobudi, Mulanda and The Service for the Consecration Dedication and Blessing of Semu K. Ofumbi Memorial Chapel St. Paul's Church, Nyamalogo, Mulanda, Entebbe*: Government Printer.

Republic of Uganda

1958-1970 *Uganda Gazette Vol.LI~LXIII*. Entebbe: Government Printer.

Wilson, E. G.(ed.)

1963-1964 *Who's Who in East Africa*. Nairobi: Marco Surveys.

### 【追記】

本稿に採録した写真はすべてオフンビ家の許可を得て掲載しています。許可なく複製はご遠慮ください。

この研究は、以下の研究の一部をなすものである。記して感謝する。「アフリカ妖術研究の理論を検証する—ウガンダの事例にもとづく微視的分析」平成24年度～26年度科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号24520912）、日本学術振興会。「悪」として取り締まられる妖術、

「悪」を取り締まる「呪詛」の人類学的研究」平成27年度～平成29年度科学研究費補助金（研究代表者、基盤研究（C）、課題番号15K03042）、日本学術振興会。

Appendix



A I-1 ヒースロー空港のタラップを降りる (A1)



A I-5 I・ギルモアとオボス=オフンビ (D2)



A I-2 コートを脱ぐオボス=オフンビ (A1)



A I-6 キャリントン卿と (D4)



A I-3 ホワイト・ホールで車を降りる (W)



A I-7公式会議の様 (D3)



A I-4真ん中がオボス=オフンビ (G) \*



A I-8 グロスヴェナー・ハウス・ホテル (G)

(All Rights Reserved©Ofumbis; Unauthorized Use Prohibited.)



A I-9 グロスヴェナー・ハウス・ホテル (G)



A I-13 ルカカムウァ夫妻 (H)



A I-10 右はJ・J・パークス (H)



A I-14 要人たちと (H)



A I-11 右から二人目はキャリントン卿 (H)



A I-15 ハイド・パーク・ホテル (H)



A I-12 ルカカムウァ夫妻 (H)



A I-16 ルカカムウァ夫妻 (H)



A I-17 ルカカムウァ夫妻 (H)



A I-21 ビジターズブックに記帳 (R)



A I-18 要人たちと談笑する (H)



A I-22 ルカカムウァ (R)



A I-19 視察 (R)



A I-23 最新のトランシーバー (R)



A I-20 E・T・ハリソンと



A I-24 最新のトランシーバー (R)



A I -25 (M1) レーダーの視察



A I -29 随行するアダムズ氏



A I -26 レーダーの視察か



A I -30 ブリーフィング (未詳)



A I -27 エントランス (未詳)



A I -31 兵器模型 (AC1)



A I -28 エントランス (未詳)



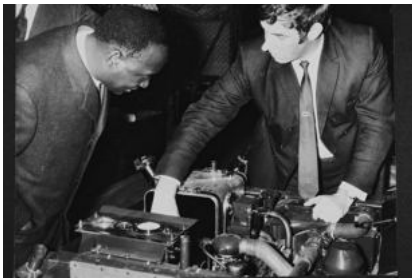
A I -32 ブリーフィング (AC1)



A I -33ブリーフィング (AC1)



A I -37 (AC1)



A I -34軍用機器の説明を受ける (AC1)



A I -38装甲車に乗ってみる (AC3)



A I -35 (AC1)



A I -39装甲車に乗ってみる (AC3)



A I -36 (AC1)



A I -40装甲車の内部 (AC3)



A I -41 装甲車 (AC3)



A I -45 (B)



A I -42 ブルック・マリン・シップ・ヤード (B)



A I -46 軽食か (未詳)



A I -43 駆逐艦の視察 (B)



A I -47 小型のボート (B)



A I -44 軍用船の視察 (B)



A I -48 ボート内部の見学 (B)





A I -49 ボートに乗ってみる (B)



A I -53 ホバークラフト (SO)



A I -50 F I 撮影者か



A I -54 公共機関の進歩に驚く (SO)



A I -51 (WS)



A I -55 一般客とワイト島へ (SO)



A I -52 (SO)



A I -56ワイト島 (P)



A I -57 プレッシー社のレーダー (P)



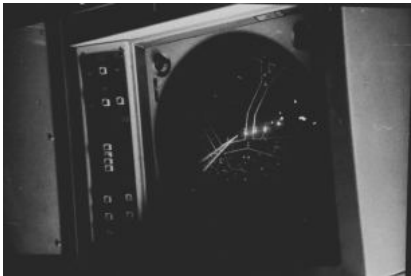
A I -61 社屋に到着 (P)



A I -58 管制システム (P)



A I -62 社内で (P)



A I -59 レーダーのモニター (P)



A I -63 ホバークラフトでポーツマスへ (PO)



A I -60 敷地内を視察 (P)



A I -64 ポーツマス行き (PO)



A I -65 軽食をとる (VT1)



A I -69 ボート (VT2)



A I -66 軍用ボート視察 (VT2)



写真1 ACKの墓に献花するムセベニ大統領



A I -67 帰りの列車か (?)



写真2 ゴドフリーと握手するムセベニ大統領



A I -68 ルカカムウア (H) \*

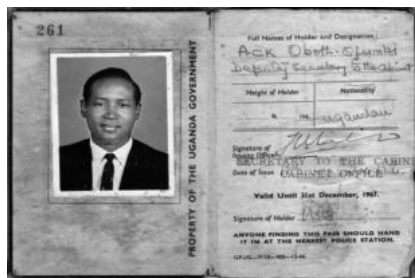


写真3 オボス=オフンビのIDカード

\*印の写真は、配列が間違っていると思われるもの